

## 「榿の木の下で (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

大学構内の「日時計広場」には、2本の榿の木(シラカシ)がある。日時計が設置される場所なので当然日当たりは良く、榿の木本来の「自形」に育っている。



榿の木の周囲にはベンチが設けられ、大学生が談話をしたり昼食をとったりするのに利用できるようになっている。榿の木にとっては迷惑な施設だが、子どもたちが自然観察をするには、誠に都合が良い。



大学構内の主な樹木には、このような名称札がつけられている。和名、学名、科名、漢字表記がある。和名がカタカナになっていること、漢字併記があることが優れている。説明文は簡潔だが、植物の形態や生態も中でも最も重要な事項は抜けていない。「ドングリの皿」という表現も、実は形態的には正しい。

名称札の説明文にもありように、シラカシはブナ科の常緑樹である。ブナ科 *Fagaceae* は、常緑樹と落葉樹が混在する、珍しい分類群である。クリを除けば、すべて「堅果」(正確には殻斗果)と呼ばれる果実をつける。これが俗に「ドングリ」と呼ばれている。



ブナ科の落葉樹である、コナラやクヌギと同じように、シラカシも秋に実を落とす。日時計広場にあるシラカシも11月に入るとおびただしい数の実を落とす。大学生はドングリなどひろわないので、榿の木の下は、落ちたドングリで一杯になる。



子どもたちはドングリが大好きだ。観察用には1個か2個あれば十分なのに、何十個もひろって、ポリ袋やR1(乳酸菌飲料)の容器に入れている。まるで「ドングリを見つけたらいくつでも拾う」という遺伝子を持っているかのようだ。考えてみれば、私が子どもの頃もそうだった。小学校の校庭にコナラの木がたくさんあって、千個ぐらい集めた記憶がある。あとから「コナラシギゾウムシ」の幼虫が出て来て困ったものだ。